

「青春時代」という言葉があるように、春は嵐の季節でもあります。凍りついた大地が、振り続ける雨によってぬかるみ、再び新しい命が生まれる季節が到来します。大地を潤す雷雨も、また神の恵みの一部分なのだと思います。

### 「喜び必需品」

「生活必需品」という言葉があります。衣食住の最低限の水準を守るために、必要な持ち物を指します。それを超えるものは「ぜいたく品」と呼ばれます。京都の有名な洋菓子メーカーが、キャッチコピーに「しあわせ必需品」と打ち出しています。その心は、贈り物は人の心を幸せにする必需品、そこにおいしいものがある、という幸せは、誰にとっても必要なこと、ぜいたくとは違うのだ、というメッセージです。

なるほどなあ、と美味しいお菓子をいただきながら、ふとこのメッセージが、今朝の聖書の箇所とも少し関わっていると思いました。「生活必需品」「幸せ必需品」があるとすれば、「喜びをもたらす必需品」はなんだろうか、と考えてみたいのです。

結論からいうことは野暮ですが、それを聖書は「与えること」「捧げること」、今年のテーマに合わせて大胆に言えば「献身」だと語っています。

自分にもしないような高価なものを、大切な人に贈ること。誰かのために自分が犠牲を払うこと。周りの人から反対されようと、自分の生涯を誰かを救うために投げ出すこと……。人間が、どうしてそんなことをするかというと、それによって最高の喜びをその人自身が体験するからだ、ということができるとでしょう。生活必需品がなくても、人はどうにか代わりのもので生きてゆきます。同じように、この喜びの必需品を持っていなくても、「受ける喜び」で暮らしてゆけます。しかし、どこかで、自分の人生には輝きが無い、大切な何かが欠けている、という不安は残るでしょう。イスカリオテのユダのように。銀貨30枚を手に入れても、喜びはありませんでした。

### 香りの捧げ物

受難節の出来事の中で、このナルドの香油の物語が、私はとても好きです。マリアの贅沢の極みとされる行為が、実に謙遜の精神を鮮やかに表すことに、心が洗われるからです。イエス様は御生涯の中で、4回香りの贈り物を受けられています。誕生の時に博士から没薬を、罪深い女から今回と同じように香油を、そして今回のマリアからのナルドの香油を、そして埋葬の時にアリマタヤのヨセフとニコデモから30キロの没薬と沈香を、です。人々から捧げられた香りが、イエス様から放たれていたことを想像すると、彼らの体験した喜びの記憶に、誘われるような気持ちになります。

喜びは、神様が私たちのうちに与えてくださった、素晴らしい恵みです。それは、自らのうちに生み出すことができるのです。ナルドの香りは、そう教えています。